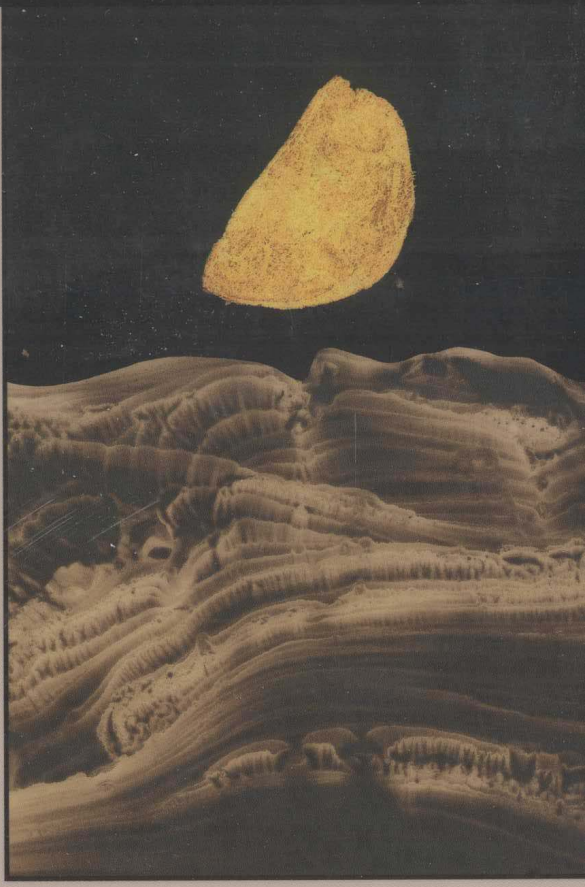
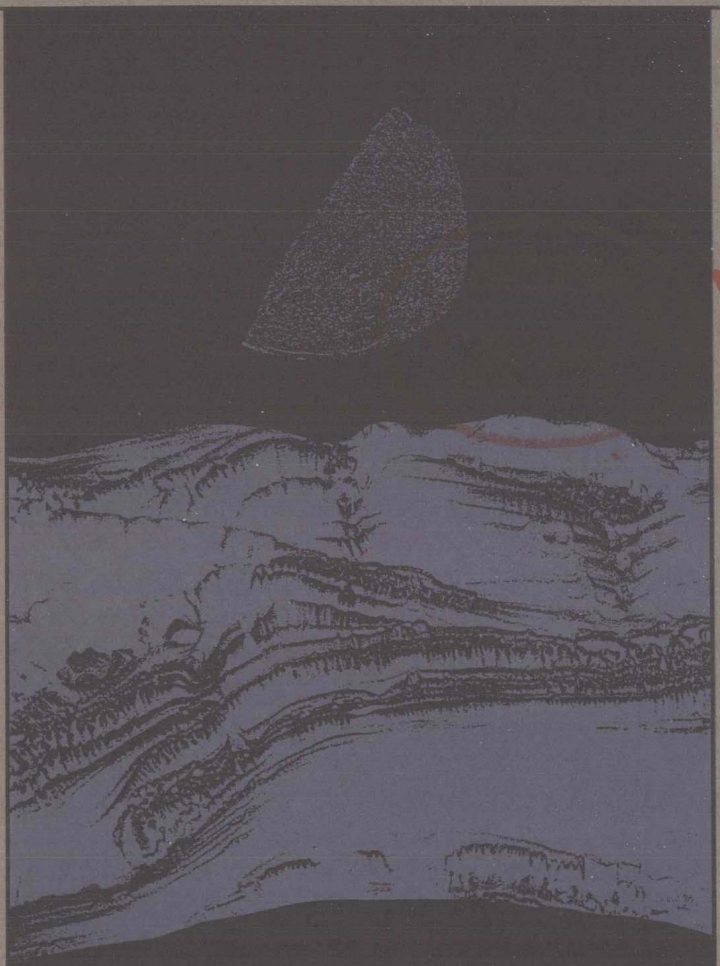
吉野鳥雲抄

前登志夫



角川書店

焦霊抄



角川書店

吉野鳥雲抄
平成元年七月十五日初版発行

著　者　前　登志夫
発行者　角川春樹
印刷所　暁印刷株式会社
製本所　株式会社鈴木製本所
発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―一三―三
電話　営業〇三―八一七―八五二一
編集〇三―八一七―八四五一
振替東京三―一九五二〇八　〒一〇二
落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN4-04-883236-0　C0095

吉野鳥雲抄／目次

I

異形の夢を　八
雪夜の寒満月　一一
今はやたぬし　一四
冬の旅　一七
立春の雪　二〇
無用の悲しみ　二三
枝打ちの音　二六
早春の山の寒さから　二九
花なけれども　三二
冬の余韻　三五
花咲くまえの寒さ　三八
桜咲く日に　四一
まだ見ぬかたの花を　四四
花の山に月と雪　四七
春の嵐の山から　五〇
吉野遊行抄　五三
ホトトギスを待つ　五六
碧玉のしたたり　五九

無用の長物　六三
死と再生の歌　六五
雨の夕映え　六八
ある乞食のこと　七一
よしやうらぶれて　七四
聖なるミサキ　七七
つゆひぐらし　八〇
幻の村　八三
庶民の哀歓　八六
驟雨の白い膜　八九
秋立つ日に　九三
盂蘭盆の火の祭典　九五
クワガタとの夜　九八
夏の終わり　一〇一
葛の花　一〇四
幻の『ヤママユ』のこと　一〇七
疵を舐める　一一〇
唱歌をうたう　一一三
異様の者　一一六
秋の夕べの街から　一一九
鬼のしわざ　一二三
ただよう雲　一二五
紅葉を焚きぬ　一二八
初冬のけものみち　一三一
永遠なもの　一三四
つたなきを泣け　一三七
神ながらなる寒さ　一四〇
山の夜の響き　一四三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

歳晩の星座　一四六
II
新春の暮らしの風儀　一五〇
小豆粥を食べながら　一五三
夢千夜　一五六
村おこし　一五九
雪の市を過ぎて　一六三
「冬の旅」を聴く　一六五
無間奈落　一六八
春寒く　一七一
含羞の時　一七四
野遊び　一七七
未開の誇り　一八〇
花野に眠る　一八三
いきづく時を共有して　一八六
花を惜しむ　一八九
花びらのしずく　一九三
黄金の時間を　一九五
辺境の声　一九八
若葉の陽のしたたり　二〇一
一期一会　二〇四
鹿踊りの森　二〇七
雨の季節のまえに　二一〇
青梅のつぶら実の下で　二一四
端午の蒼い風　二一七
雨の夜の幻想　二二一
千里阪急ホテルにて　二二四

火雷神　二二七
辺土の声　二二〇
まひるの闇　二二三
真夏の日輪出でよ　二二六
秋立つ日の山　二二九
生き死にの涯　二四二
遥かな死者たち　二四五
石地蔵のかたわらで　二四八
あとがき　二五一

吉野鳥雲抄

裝釘 司修
題字
著者

I

異形の夢を

南天の実が大きな房となって垂れている。新春のひかりに輝いている赤。近くのどの柿の木もまだたくさんの実を、正月の空に掲げている。

ヒヨドリの鳴き叫ぶ声はきこえるが、この冬はどこかに食べ物が豊富にあるらしく、南天の実を食べにこない。

七草の日に梅林へ行くと、紅梅や白梅はまもなく花ひらきそうだ。四日の夜の雪みぞれが雪となり、五日はいちめんの雪景となったが、翌朝起きると、みるみる雪は消えてしまった。

あたたかな正月をありがたくおもい、すこし物思いにふけって松の内を過ごしていると、たちまち数か所から原稿催促の電話を受け、世の中はもう今年の活動をはじめたのだなと心をひきしめる。

年賀状をまだ半分も書いていないのに、七草が過ぎてしまった。年賀状という空疎で煩わしいものをいさぎよく廃止しようと、この十年来いつも深刻に考える。しかしその

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

決意はあえなく崩れてしまう。年々に増してしまった千数百枚の賀状を、一枚一枚丁寧に拝見していると、平素は忘れている人々とのありがたい縁がよみがえり、日常のうちではつい忘却しがちな人生の歳月のひろがりが実感させられるからである。

いうまでもなく中にはしごくおざなりの、虚礼の見本のようなものがあり、師走の慌しい日々に義理がたく、おそらく舌打ちしつつ宛名を書きとばしたというものもある。ゴシック活字で、でかでかと自分の氏名や商標や電話番号を印刷しただけのものになると、ガチッと砂を嚙んだような思いにもなる。

二百枚ぐらいを限度にして毛筆で丁寧に書きたいとおもうがままならぬものだ。日頃は交渉のない見知らぬ人々からの心のこもった挨拶があり、一行でも返事を差し上げたくなる。毎年、旧正月元旦などとして遅れた返事を出す。

ことしのも年賀葉書の発売と同時に千枚余りを購入し、すぐ印刷へ渡したが、少し挨拶の言葉を入れたく、その文章を考えているうちにたちまち一か月が過ぎた。クリスマスの夜になって、電話で、謹賀新年だけでよいから一刻も早く刷り上げて宅配にしてくれと依頼した。我ながらあきれざるをえない。

感嘆するほどみごとに美しい手作りの賀状もあるが、賀状の功徳は一行のことばが飾り気なく書きこまれているところにある。型通りの文面でなく、発信者と受信者との個

人的なことばの伝達こそその生命であろう。年賀状という定型の約束があればこそ、見知らぬ人も、十年の無音も一行のことばで簡単に了解し合える。

それは歌という定型にも同じことがいえるだろう。俳句もそうだ。定型の約束があればこそ、そこに感ぜられることばはうんと個性的でなくてはなるまい。次のような一首の歌が書かれていてぎょっとさせられた。

つくづくと異形の貌の師を仰ぎ従きゆくべしとさらにおもひき　　詠み人知らず

「テレビ『万葉びとの歌ごころ』を観て」とある。

かつてある批評家が、わたしの作品を揶揄しつつ論じて、イースター島の石人像を連想させるような異形だと、わたしの風貌について書いていたのをおもい出した。

どこまでも蒼い空と海にとりまかれた神秘の島で、いつ誰が造ったともわからぬ石人たちは、無限の時空のかなたをぼうっと夢見ている。

ことしの初夢をそのあたりに重ねてみよう。

雪夜の寒満月

山を下りるときは夜明けのはだれがほとんど消えていた。

――そろそろ、この坂道こわくなりますなあ。去年もタイヤチェーンを巻いたのにより登りませなんだ。

ことしもわたしは山を下りて街へ出る。タクシーの運転手さんの話に相槌を打ちながら、近年しだいに気軽く山家と都市の往復ができるようになったことについて、ぼんやりと考えていた。年とともに動くのはおっくうなのだが、ことさら身構えた抵抗感覚のようなものがなくなり、山も街も自在にひと続きの空間となりつつある。

大阪千里でもおりおりはげしく雪が降った。翌朝、山から一面の雪景色だとしらせてくる。細君は何回も坂道の雪掃きに出たが、そのあとすぐ白く降りつもったという。陽光さんさんたる大阪からは想像もできないが、わたしはそんな雪の日の山の気象をよく知っている。

北千里の公園の入口には、とんどの案内が大きく立てられている。小正月の行事が、

この新しい都市にも復活しているのをおもうと、すこし気分が安らぐ。

夕暮れの電車から、大和平野の夕闇のなかでまだ燃えているとんどの火を見た。新年の望の月を迎えるために、人々は日常の罪けがれを焼き浄める。わたしはわずか二泊の大阪での時間を、もう一つの鞄に詰めこんでいるような気分だ。

下市の町はずれ岩森の辻では、とんどは真っ盛りだった。そこを過ぎて広橋峠にさしかかると、道路の両側に夜の雪は白く続いている。いよいよ、わたしの山家の谷間へ辿りつくと、ついにタクシーは立往生した。

重たい鞄をかついで漸く山家の庭まで帰りついたとき、ひさびさに帰郷というわたしの生の主題が、うつくしいシンフォニーとなって鳴りひびくようであった。

折しも東の峯に寒の満月があらわれ、めぐりの雪の山なみが白銀のひかりの帯となって、けぶっている。庭の雪を踏みつけると、かたくこばみながらもわたしの靴を、きびしく食いこませる。わたしはしばらく玄関にはいらないで、くき・くきと夜の雪の靴音を立てながら、少年のように庭先を歩いた。

——雪が降ったといって、子供のようにはしゃいでたら笑われますよ。そんなに咳してんのに。

山のカミの小言がはじまる。

――受験の日にこんな雪来たらどうしますの。

――先にすべっておくと余裕ができるかもしれんよ。

家族が寝しずまってから、わたしはもう一度外に出て、夜の雪の山が白く輝くのを眺めた。もう月は高く昇り、山の雪が照り返すひかりは落ち着いていた。

山の暮らしは日常のすべてを遥かなものにする。家族すら遠くに存在するようにおもえる。日常からへだたる結界の境を、わたしたちはいつも往き来しながら、その境すら見失うことがある。

聖なるとんどの火を囲んで、森の奥で夜神楽をする笛の音がきこえる。

今はやたぬし

将来すこしひまができるようになったら、日本の辺境の地に杖をひきたい。もうすこし若いころは、地球上の地の涯のような異風土につよいあこがれをもっていたが、もはやそれはしんどくなった。書物や写真集などによって空想をはせるにとどまるほかはない。

名もない日本の町や村や、山の中や海辺に、忘れられたように人間の暮らしがいまも在る所を訪ねたい。いまどき、どこへ行ってもそんな桃源郷はあるわけはないと半ばあきらめつつも、年来のあこがれはしぶとくくすぶっている。

家族にそんなことを話すと、あちこちを遍歴してみて、ああこの山家の村こそ桃源郷だったという発見にたどりつくのではないかと、からかわれてしまった。

村という共同体のなかでは、ふしぎに感度のいいテレパシーがいまも生きている。かなり遠くの村びとの家々の出来事や、その家々の感情の明暗まで了解し合っている。村に生まれ、村に住みながら、わたしにはこのテレパシーが著しく退化し、鈍感になって

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com